

平成六年度 陵墓関係調査概要

陵墓調査室

当部においては、古代高塚式陵墓および埋蔵文化財包蔵地内等に所在する陵墓の保全・整備のために緊要な土木工事を実施しているが、実施に際しては施工区域内の遺構・遺物の有無確認、ならびに工法決定に資するため事前調査や立会調査を行っている。本年度も陵墓調査室が各陵墓監区事務所の協力を得て調査を行ったが、その概要は左記の通りである。なお、番号は事前・立会各調査の通し番号である。

事前調査

- 一、仁徳天皇皇后磐之媛命平城坂上陵（奈良県奈良市佐紀町）、整備工事
区域の調査
担当 笠野 毅、佐藤利秀、小走泰弘、山本昌弘、野上修也、鎌田幹史（畝傍監区、十一月十二月実施）
- 二、継体天皇三嶋監野陵（大阪府茨木市太田三丁目）、隣接道路拡幅改良
工事に伴う外構柵改修工事個所の調査

立会調査

- 担当 笠野 毅、今西良孝、玉石直裕（桃山監区、十二月実施）
- 三、男狭穂塚女狭穂塚陵墓参考地（宮崎県西都市大字三宅字丸山）、外周垣改修その他工事個所の調査
担当 福尾正彦、横山忠雄、日高正晴（桃山監区、十二月実施）
- 四、舒明天皇押坂内陵（奈良県桜井市大字忍阪）、電線埋設替工事個所の調査
担当 中村直嗣（畝傍監区、七月実施）
- 五、長慶天皇嵯峨東陵（京都府京都市右京区嵯峨天竜寺角倉町）、鳥居改築工事個所の調査
担当 長谷川政明、瀬尾義弘（桃山監区、八月実施）
- 六、弘文天皇長等山前陵（滋賀県大津市御陵町）、鳥居改築工事個所の調査

担当 寺田勝比古、高橋秀明（月輪監区、十月実施）

七、欽明天皇檜隈坂合陵（奈良県高市郡明日香村大字平田）、危険防止柵設置工事個所の調査

担当 西村寛治、古河稔也（畝傍監区、十月実施）

八、光厳天皇分骨所（大阪府河内長野市天野町 金剛寺内）、石積改修工事個所の調査

担当 木林成嘉、真銅慶一（古市監区、十二月実施）

九、後一条天皇菩提樹院陵（京都府京都市左京区吉田神楽岡町）、見張所改築工事個所の調査

担当 徳田誠志、内海克己、宮田幸一（月輪監区、十二月実施）

一〇、六条天皇清閑寺陵・高倉天皇後清閑寺陵（京都府京都市東山区清閑寺歌ノ中山町）、見張所改築工事個所の調査

担当 徳田誠志、内海克己、宮田幸一（月輪監区、十二月実施）

一一、景行天皇山辺道上陵（奈良県天理市渋谷町）、墳塋および外堤保護その他整備工事区域の調査

担当 福尾正彦、梅森康史、中村直嗣、西田哲也（畝傍監区、十二月実施）

三月実施）

一二、男狭穂塚女狭穂塚陵墓参考地（宮崎県西都市大字三宅字丸山）、外周埴垣改修その他工事個所の調査

担当 福尾正彦、横山忠雄、日高正晴（桃山監区、十二月三月実施）

一三、淳仁天皇淡路陵（兵庫県三原郡南淡町賀集字岡ノ前）、鳥居改築工事

個所の調査

担当 真銅慶一、中辻 武（古市監区、一月実施）

一四、仁徳天皇百舌鳥耳原中陵（大阪府堺市大仙町）、余水吐および樋門改修工事個所の調査

担当 山本良文、富賀 稔、井上 武、寺本公通（古市監区、一月二月実施）

一五、晃親王墓（市都府京都市東山区泉涌寺山内町）、駒寄鉄扉取設その他工事個所の調査

担当 曾田誠二、藤井 勲（月輪監区、二月実施）

一六、鳥羽天皇安楽寿院陵（京都府京都市伏見区竹田内畑町）、濠内堆積土浚渫工事個所の調査

担当 北村浩二（桃山監区、二月実施）

一七、宇治陵（京都府宇治市木幡）、陵名石標設置工事個所の調査

担当 川下幸誠、松岡義泰（桃山監区、二月三月実施）

一八、春日宮天皇原西陵（奈良県奈良市矢田原町）、鳥居改築工事個所の調査

担当 小走康弘、山本昌弘（畝傍監区、二月三月実施）

一九、長屋王墓（奈良県生駒郡平群町大字梨本）、鳥居改築工事個所の調査

担当 多田京介、大林茂男（畝傍監区、二月三月実施）

二〇、朱雀天皇醍醐陵（京都府京都市伏見区醍醐御陵東裏町）、外構柵改修工事個所の調査

担当 田端勝一（桃山監区、二―三月実施）

三、継体天皇三嶋監野陵（大阪府茨木市太田三丁目）、隣接道路拡幅改良
工事に伴う外構柵改修工事個所の調査

担当 今西良孝、玉石直裕（桃山監区、三月実施）

三、明治天皇伏見桃山陵（京都府京都市伏見区桃山町古城山）、外構柵そ
の他改修工事個所の調査

担当 藤林幸祐、坂本博史（桃山監区、三月実施）

三、顕宗天皇傍丘磐坏丘南陵（奈良県香芝市北今市）、下水道管渠築造工
事個所の調査

担当 小林利雄、大林茂男（畝傍監区、三月実施）

二、磐園陵墓参考地陪冢茶白山（奈良県大和高田市大字築山）、駒形制札
改修工事個所の調査

担当 小林利雄、大林茂男（畝傍監区、三月実施）

三、富郷陵墓参考地（奈良県生駒郡斑鳩町大字三井）、駒形制札改修工事
個所の調査

担当 小林利雄、大林茂男（畝傍監区、三月実施）

三、垂仁天皇陵菅原伏見東陵陪冢ろ号（奈良県奈良市平松町一丁目）・

は号（同市尼辻西町一丁目）、駒形制札改修工事個所の調査
担当 鎌田幹史、野上修也（畝傍監区、三月実施）

本年度の事前調査は、仁徳天皇皇后磐之媛命平城坂上陵において、次

年度に予定している墳丘裾部および内堤外法裾の各浸食個所の護岸工事
を行うに先立って、遺構・遺物の確認と、それを踏まえての工法を決定
するために実施したものである。調査結果については、後掲の担当者に
よる報告を参照されたい。また、調査期間中に、大阪文化財センター理
事長坪井清足氏、建設省土木研究所砂防部長矢沢昭夫氏、奈良教育大学
名誉教授梅田甲子郎氏の三方にそれぞれ調査現場の検分を委嘱し、考古
学・土工学・地質学などの各分野から工法等に関して貴重な御助言と
御指導を受けた。

二の継体天皇三嶋監野陵は、茨木市が同陵に隣接する市道の拡幅工事
を行うのに伴い、同陵の外構柵を改修する補償工事にかかる事前調査と
して実施したもので、同陵の前方部東側の外堤部分三個所に長さ二メー
トル、幅一メートル、深さ六〇センチのトレンチを設けて掘削した。そ
の結果、トレンチは三個所共に後世の盛土、またはその可能性の強い地
層が認められた。遺物として、埴輪・妬器・陶器・磁器などの破片合計
一七点が出土した。

事前調査は今一件、三の男狭穂塚女狭穂塚陵墓参考地で行った。(1)
金網フェンス及び擁壁取設、(2) 男狭穂塚参拜所の整備工事に伴い、
(1) の予定箇所の一部に隆起したところがあって、古墳の可能性もあ
るのでトレンチを設けるとともに、(2) にある埴輪の正確な位置・樹
立状態を確認するため調査したものである。その結果、(1) は外堤が
内側に張り出したところに後世盛土されたものであり、(2) の埴輪は

列立したのではなく、一個のみが原位置を保っていた。

次に立会調査であるが、これは陵墓調査室の室員が現地赶赴して実施したり、あるいは調査室員の指導のもとに所轄陵墓監区の調査補助員の職員が担当して行い、それぞれ遺構・遺物の有無を確認し、埋蔵文化財の保存と工事等に遺漏なきよう努めた。以下、各項について調査結果を略述する。

まず四は、見張所の電線を埋設替える工事で、電柱埋設坑および電線埋設溝等の掘削に立ち会ったが、掘削土は人頭大の山石を置いた上を茶褐色砂質土で覆ったり、あるいは山石混じりの茶褐色砂質土を置いた盛土と推測されるもので、遺構・遺物は検出されなかった。

五・六・三・六・元は、いずれも経年で朽損した鳥居の改築工事で、掘削箇所は在来の基礎部分のみであり、遺構・遺物は検出されなかった。

七は、外堤の南西角から東側渡土堤にかけての範囲に危険防止策を取り設ける工事で、丸パイプフェンスおよび門扉設置箇所の基礎部分一六箇所の掘削に立ち会った。このうち外堤の東から北側にかけての基礎内には地山が検出されたので、当陵築造時に丘陵を削り出したものであり、残りの南側外堤は後世の盛土によるものと考えられる。遺構・遺物は検出されなかった。

八は、経年による内圧等のため一部崩壊した箇所も含め、石積を基礎部分まですべて取り除いた後、在来の石を再利用して積み直すという全面的な改修工事である。これの掘削に立ち会ったが、掘削箇所は過去に

も掘削が行われており、その下には自然の流れ込みの土と堅く締まった砂質粘土層（礫混じり）ばかりで、遺構・遺物は検出されなかった。

九は、見張所の改築に当り、その基礎部分及び浄化槽、マンホール、電線引込柱等の各設置箇所、ならびに電線引込線の埋設箇所を掘削するもので、掘削部分が比較的広く、また割合深く掘るため、本部調査室員も派遣して立会調査を行った。掘削箇所の土層は大きく二層に分けられ、一層は旧見張所への水道管埋設の際の盛土であり、二層は黄褐色の粘質土で地山と考えられる。これらの点を総合すると、旧見張所は北から延びる丘陵の地山を削り出して見張所の基礎としていたものと思われる。石積部分も含め、遺構・遺物は出土しなかった。

一〇は、九と同じく見張所改築の基礎部分の掘削に立ち会ったが、掘削部分が比較的広く、また割合深く掘るため、本部調査室員を派遣しての立会調査を行った。掘削箇所の土層は大きく四層に分けられ、一層は現在の拝所の表土であり、二層は拳大の礫を多量に含む黄褐色粘質土で、三層も基本的には二層と同質の土層であるが、西に向かって斜めに堆積していた。四層は比較的締まった茶褐色の粘質土で、これが地山と考えられる。以上の所見を総合すると、現拝所は周囲の傾斜面を削平して盛土したものと思われる。遺構・遺物は検出されなかった。

二は、前年度に事前調査を行ったところで、本年度の工事実施に際し、本部調査員を派遣して掘削箇所の立会調査を行った。遺構は検出されなかったが、埴輪・土師器・瓦の破片等が出土した。その所見につい

では、後掲の担当者による調査報告を参照されたい。

三は、同参考地にコンクリート擬木柵や金網フェンス柵、ならびに出入口の開扉などを取り設ける整備工事に係る調査で、二回にわたり実施した。この調査については二回とも後掲の調査報告を参照されたい。

二四は、同陵の樋の谷と称される場所にある余水吐が漏水するので、これを防止するために床面の玉石を張り替え、止水壁を設置し、併せて樋門の改修を行うという工事の掘削に立ち会った。掘削箇所のうち、床面の玉石張替箇所ではコンクリートの下は灰茶褐色粘質土と黄褐色粘質土が混入する攪乱層であり、その他の掘削箇所も全体に攪乱を受けた様子が認められたため、在来石積と遮水壁を設けた際の裏込土や埋戻土と考えられる。遺構・遺物は検出されなかった。

二五は、駒寄鉄扉設置個所の基礎部の掘削に立ち会った。土層は上から表土、黒色細砂層、茶色粘土層および赤茶色粘質土層の四層に分かれる。下二層は地山と推定される。遺構・遺物は検出されなかった。

二六は、御陵を囲繞する濠に長年の間にわたって積もった堆積土を浚渫する作業に立ち会ったものである。浚渫の範囲は堆積土表面より約五〇センチの深さに及ばず、また殆どの土砂が黒味がかかった灰色のヘドロ状のものであるため、遺構・遺物は検出されなかった。

二七の宇治陵は、平安時代の藤原氏出自の皇后など一七方の陵所である。該所に陵名石標を一九箇所設置する工事の各基礎部分の掘削に立ち会った。いずれの掘削箇所共に、土層は同一の様相を呈し、表土（灰褐

色または黒褐色、礫混じり）、盛土（赤褐色または黒褐色の粘質土、木片・礫混じり）、地山（硬い赤褐色粘質土）の三層に分かれるもので、遺構・遺物は検出されなかった。

二八は、在来の木製外構柵を金網フェンス柵に改修する工事の基礎部の掘削に立ち会ったものである。いずれの掘削箇所も小石混じりの茶褐色の表土と、小石混じりの赤茶色の地山であり、遺構・遺物は検出されなかった。

二九は、二に既述の外構柵の支柱基礎部分二六箇所の掘削に立ち会った。掘削範囲の土は後世の客土及び盛土であり、埴輪片が二点ほど出土したほかは、特段の遺構・遺物は検出されなかった。

三〇は、既設の外構柵を格子フェンス柵に改修し、併せて陵墓地出入口の門扉の改修等を行う工事の掘削に立ち会った。掘削箇所はいずれも昭和三十一年に市道を拡張した時の既設外構柵等設置時の盛土等で、地山は確認されず、遺構・遺物も検出されなかった。

三一は公共下水道の整備に伴い、陵墓地内に排水柵を取付け、本管に接続する工事に立ち会った。掘削範囲は地山を含む自然堆積層で、遺構・遺物は検出されなかった。

三二は駒形制札を改修又は設置に際し、その掘削に立ち会った。掘削した範囲内は、表土と流れ込み土又は盛土と思われるが、葺石や埴輪などの遺構は認められず、遺物も出土しなかった。

以上述べてきたように、立会調査箇所はいずれも遺構・遺物は検出さ

れず、また原位置を保った遺物も認められず、当初予定したとおりの工事を施工することができた。

つぎに、例年行っている墳丘部表面調査であるが、本年度は仁徳天皇百舌鳥耳原中陵で実施した。

石塔調査は、宇倍野陵墓参考地（鳥取県岩美郡国府町大字岡益、月輪監区、三月実施）、顕日王墓（栃木県那須郡黒羽町大字雲岩寺、雲岩寺内、多摩監区、三月実施）、及び輪王寺宮墓地（栃木県日光市山内、輪王寺内、多摩監区、三月実施）の実測・写真撮影等を行った。

陵墓関係文献調査は、国立公文書館内閣文庫及び鎌倉中央図書館・神奈川県立図書館の各所蔵資料の調査を実施した。

なお、末尾に前号で掲載できなかった平成五年度に施工した安閑天皇陵墳坐標保護その他工事箇所¹⁾の立会調査概要を附載する。

（川田貞夫）

平城坂上陵整備工事区域の調査

仁徳天皇皇后磐之媛の平城坂上陵^{なかしんかの}は、奈良市北郊の佐紀盾列古墳群中^{なかしんかの}にあって、宇和奈辺・小奈辺両陵墓参考地とともに東支群を構成する。墳丘は、全長二一九メートルの巨大な前方後円墳で、南面する。東のクビレ部には造出しと思われる平面方形の隆起がある。墳丘の外周を二重に埴が繞る。

墳丘は著しい改変を受けており、段築も明瞭ではない。とくに前方部正面から東側面にかけて、現在最下段とされる部分は、傾斜がゆるやかで、その上部の封土の崩落または掘削、その土の下方への堆積または盛土が考えられる。汀線は、前方後円状であるが整っておらず、大小の出入りがある。水涯線の部分は、埴水の波浪による侵蝕を受け、ガマが形成され、その上部が崩落して急斜面となっている。径七、二五センチの河原石が集中して分布する箇所があって、葺石の存在を推測させる。

内埴は、前方部に面する部分が幅広く、後円部に係る部分では幅が狭い。過半が既に陸化しており、湛水部も水深が浅く、埴底は平らに近い。全体にヘドロの堆積が著しく、前方部正面中央で厚さ二メートルを超¹⁾える。

外埴は、現在、前方部正面と東西両側面に平面コの字状の旧形をとどめる。その他の部分は地下に埋没し、本来の外埴は全周していることが発掘調査によって確認されている¹⁾。地元の伝承によれば、コの字状の現外埴では、湛水能力維持のため、しばしば埴底の堆積土を浚ったとい¹⁾い、埴底は非常に固かったともいう。外埴のはぼ西半分はヘドロが堆積し、とくに西南隅から西側面にかけて著しく、陸化している。

内埴と外埴の間に内堤が全周する。東クビレ部近くの発掘調査によつて、内堤上面の平坦面に径七、八センチの円礫が敷かれ、外法肩近くに埴輪が立並べられていること、外法面に径一〇、一五センチの円礫が葺